

1 背景とねらい

「ひとめぼれ」は「ササニシキ」に並ぶ良食味品種として、本県中南部の作柄安定化と産米の品質・食味の向上のために、平成2年度に奨励品種に採用された品種であるが、「ササニシキ」に比べると栽培特性上異なる点が多い。また、消費者側の良食味米に対する要望が強く、これらに安定的に対応する必要がある。

2 技術の内容

(1) 良品質・良食味・安定生産上の規制要因

ア. 規制要因

「ササニシキ」より耐倒伏性は優るが、倒伏した場合、挫折型の倒伏となりやすく、品質・食味・収量を下げる可能性が高いため、倒伏させない栽培を目標とする。

イ. 稈長の指標

稈長82cmを超えると、倒伏する例が多くなるため、稈長の上限を81cmとする。

なお、基肥窒素量が多すぎたり、幼穂形成期と減数分裂期に重ねて追肥すると、稈長が伸びる傾向にあるため、無理な多肥栽培や重ねての追肥は行わない。

ウ. ㎡粍数の指標

32,000粒/㎡を超えた栽培では長稈となり、倒伏する例が多くなるため、㎡粍数の上限を32,000粒/㎡とする。

エ. 収量の指標

1.7mm収量で560kg/10aを超えると、倒伏する例が多くなるため、1.7mm収量で560kg/10aを標準とする。

なお1.7mm収量560kg/10aは、1.9mm収量では540kg/10a相当となる。

(2) 収量構成要素の指標 (1.9mm収量、540kg/10a)

1.7mm 収量標準	穂数 (本/㎡)	一穂粍数 (粒)	㎡当粍数 (千粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	稈長 (cm)
560	500~	58~	30~	21.0	85	78~
kg/10a	550	65	32	~22.0	以上	81

(3) 最高分けつ期茎数と穂数診断基準

	最高分けつ期茎数	穂数
本/㎡	720~840	500~550

(4) 栽培法

ア. 収量に対する規制要因

「ササニシキ」に比較すると、登熟歩合は安定して高いが、1穂粒数が少なく、穂数も「ササニシキ」並〜やや少ないため、 m^2 当り粒数が少なくなる場合が多く、 m^2 当り粒数の確保が収量の安定につながる。

イ. 施肥法

(ア) 基肥

基肥窒素量が少ないと分けつ数が少なく、穂数を確保しにくい傾向にあるので、「ササニシキ」より窒素成分量で $1\text{kg}/10\text{a}$ 程度増とする。また、この範囲内では、白米蛋白・アミロース含量に与える影響はみられない。

(イ) 追肥

指標に基づいた穂数及び1穂粒数を確保する必要があるため、追肥の重点は幼穂形成期とし、窒素成分量で $2\text{kg}/10\text{a}$ 程度以内とする。

減数分裂期追肥と、幼穂形成期追肥の白米蛋白・アミロース含量には差はないが、幼穂形成期と減数分裂期に、 $2\text{kg}/10\text{a}$ づつ重ねて追肥した場合には白米蛋白・アミロース含量が増加する例がみられるため、重ねての追肥は行わない。

ウ. 刈取適期

「ササニシキ」に比較すると登熟が早い傾向にあるため、登熟積算気温（平均気温）が $900\sim1050^\circ\text{C}$ の範囲で刈り取る。なお適期を過ぎると茶米、胴割れが多くなるので注意する。

3 指導上の留意事項

- (1) 種子の休眠性が強いため、種子予措については、現在検討中であるが、当面は、催芽前の浸種を水温の積算で 120 日度（ササニシキでは、 100 日度）とし、日数を長く浸漬する。
- (2) いもち病の真性抵抗性遺伝子型は $Pi-t$ と推定され「ササニシキ」とは異なるが、作付が増加するにしたがって「ササニシキ」並に多発すると考えられるので、「ササニシキ」に準じた防除を行う。
- (3) 穂数を確保する必要があるため、 20.0 株/ m^2 以上の植付株数とする。
- (4) 栄養診断基準については現在検討中である。
- (5) この技術の適応地帯は、北上川中下流地帯の平坦部で、安定栽培可能面積（標高 100m 以下）は $25,000\text{ha}$ である。